

# 親友・子規に送った句

## 文人の 武蔵野

夏目漱石(1867~1916年)は、近代日本を代表する文学者です。年譜を見ると、漱石(夏目金之助)の49年間の生涯の半分以上は、高等遊民として読書と思索、教育と研究に費やしていたことがわかります。その間に執筆したのは、主に評論と論文でした。漱石の小説家としての活動は、最初の小説「吾輩は猫である」を38歳の年に発表して

### 夏目漱石 ①



から「明暗」(未完)までです。今日名作として知られる小説作品は、すべて晩年の11年間に書かれています。それに対して俳人として活躍した期間は、正岡子規と出会って俳句を作り始めた22歳から数えて27年間にわたります。漱

石の創作活動の根源には、国境を超えた普遍性を志向する理論や思想だけではなく、親しい交わりの中で風流や遊びを共有する俳句という表現手段があつたのだと思います。

さて、全集に収録されている2527句の中に1句だけ「武蔵野」を直接的に詠んだ句があります。

武蔵野を 横に降る也 冬の雨

漱石は、生涯の親友だった子規に計36回、1445句の句稿を送っています。それが全集に収録されている「正岡子規へ送りたる句稿」です。「武蔵野」の句は、1896年(明治29年)1月28日付で

▲夏目漱石(国立国会図書館デジタルコレクションより)

送った40句のうちの1句です。同時期に作句したと思われる他の句をみると、季語は冬か春。場所は、増上寺(東京)、三十三間堂(京都)、瀬田の橋(滋賀)、錦帯(山口)と様々です。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

### おすすめの1冊

#### 「漱石俳句集」

夏目漱石の俳句を味わうための1冊。全俳句を収録している全集の解題に携わった坪内稔典が選んだ848句に最小限の注が付されています。漱石自身が手掛けた装幀と落款が表紙に生かされているのもまた楽しいです。



(岩波書店提供)